



総合教育センターだより

B= Connected

センターマスコット センタ君



平成23年9月15日(木)
第30号(通算第113号)
京都府総合教育センター
TEL: 075-612-3266

校内研修を支援する

出前講座

156校(所)で実施
(8月現在)

学びたいことを自校で受講できる出前講座。秋の校内研修などでも、ぜひご活用ください!

たとえば本年度新設した「中学校英語科教育講座」では

大好評!

講座の内容

1 授業改善の方向性を図るために

- 新学習指導要領外国語(英語)改訂のポイント
- 小学校外国語活動の理解
- 京都府中学校学力診断テスト結果が示唆するもの

2 研究協議

- 学習者にとって何が大きなハードルなのか
- そのハードルを克服するための工夫
- 英語の苦手な生徒に対する授業改善の工夫

受講者の感想

- ・ 文字指導でどう定着させていくか考えているところでした。こんなふうに教えていけばよいのかと参考になりました。
- ・ アットホームで話しやすかった。音と文字の関係のテスト、自己表現のプラスワンなどこれからの授業で生かしたいと思います。

出前講座の申込方法

センターから各学校に配布している「研修講座の概要」(P10他)でご確認の上、センター担当各部にお電話ください。中学校・高等学校教科教育に関する出前講座の場合、近隣の学校の教科の先生方が集まっていたら受講することもできます。

講座等の報告

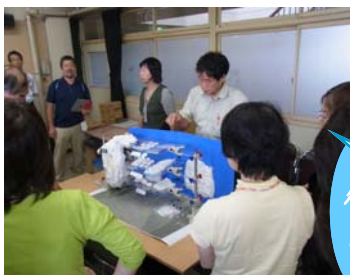


お知らせ

受けてみたいな、こんな講座

受けてみたいな、こんな講座

「雲を見て、空から学ぶ気象学」講座 8月24日(水)



今朝の天気図から今晚の天気を予想し、ニュース形式で本番さながらに発表するなど、授業に役立つ内容を体験的に学びました。

感想

空のおもしろさを実感しました。子どもたちにも是非伝えていきたい。

みなさんから「受けてみたい講座」を募集します。

【応募期間】

10月1日(土)~11月25日(金)

【発表】 12月中旬

※詳しい内容については、9月下旬にセンターHPに掲載しますので、ご覧ください。

京都大学と京都府教育委員会の連携事業

「京の教員特別セミナー『小学校教員理科学研究』」

7月25日(月)~27日(水)

3日間にわたり京都大学総合博物館や晴明神社、花山天文台などで講義や演習を行いました。(写真は、花山天文台での研修風景です。)



感想

- 最前線の研究者の方とのコミュニケーションは刺激的でした。子どもにとっても本物との出会いが大切だと痛感しました。マンネリ化している今の実践に対して大いなるエネルギーをもらいました。
- 理科という教科を、芸術や歴史的な事柄と関連させて考えることで、より視野が広くなり、多角的なアプローチができることが分かりました。



一読み書きが困難な子どもへの支援②



学になる子どもの理解と対応

Q 小学校1年生のYさんですが、知的遅れはないのに、まだひらがなの読み書きが十分にできません。LD(学習障害)なのでしょう。読みは逐次読み(たどたどしい拾い読み)です。文字の書き写し練習は、最初のうちは集中して取り組みますが、しばらくすると「できない」と言ってやめてしまいます。無理にさせようとするとう暴言等の不適応行動が起こります。縄跳びなど、リズムや協調性が必要な活動や運動模倣が苦手です。

見立て

知的な遅れがないのに読み書きが困難な子どもは、多くの場合、特異的な認知特性であるLDではなく、他の子と同じペースや練習量、練習方法では習得や定着が難しい子どもと考えられます。

Yさんの場合、眼球運動、左右の協調運動に大変なエネルギーが必要かもしれません。また縄跳びや運動模倣が苦手であったり、何回練習しても文字を覚えられないといった場合、固有感覚に課題があることが考えられます。

いつも「できるはずなのにできない」ことに苦しんでいる上に、「努力不足」や「がまんがない」といった言葉をかけられると、自己肯定感の低下による適応不全が起こります。

子ども理解を進めるために



固有感覚

筋肉や関節が感じとる感覚を固有感覚といいます。階段を上るとき足を上げる高さを目で確かめたり、意識しなくても自然とほどよい高さにあげられるのは固有感覚があるからです。固有感覚に課題があると、運動模倣ができなかったり、何回練習しても字が覚えられないといったことが起こりやすくなります。



自己肯定感

固有感覚等でつまずきのある子どもに、「やる気」の問題として対応し続けると、学習意欲が低下するだけでなく対人関係においても様々な不適応が起こります。大切なのは「できない」子どもの気持ちを理解し、「できない」内容を分析するとともに、無理なく「できる」支援を考えることです。

指導のポイント

楽しみながらできる
取組が有効です。

逐次読みが続く場合、
2文字かたまりのリズム
から練習しましょう。

書き練習は
量より質です。

なぞなぞやゲーム感覚で取り組めるような工夫をして、大人との安定した関係を育てることが重要です。当たり前のことできている時も実は大変なエネルギーを使っている場合があるのです。少しでもできたときは、ほめてあげるようにしましょう。

日本語のリズムは2文字単位が基本です。「ワタ/シノ/ナマ/エハ・・・」というリズムになります。これを「2拍フット」と言います。2拍フットのリズムで読めるようになると、やがてリズムカルに読むことができます。

固有感覚等に課題のある子どもは、たくさん書けば覚えられるというものではありません。むしろ、うろ覚えの間にたくさん書かせると、どれが正しい字か混乱することがあります。

「書く感覚」がわかりやすいように、鉛筆ホルダーを使うなどして正しい持ち方や力の入れ方ができる工夫をしたり、大きめのマス目を用意する、下敷きの代わりにサンドペーパーを敷くなどして、書く感覚がわかりやすい環境にし、一画ずつ丁寧に書く練習をする必要があります。

※詳しくは特別支援教育ガイドブック「読める！書ける！～すべての子どもが楽しく読み書きを学ぶために～」
(<http://www1.kyoto-be.ne.jp/ed-center/tokubetu/22-kenkyu/>) を御覧ください。ダウンロードもできます。

～メンタルヘルスひとロメモ～

近年、学校教育現場では若い先生方が増える傾向にありますが、職務経験が浅いこともあってストレスを抱えやすいといわれています。周りにおられる先生方が、そうした職務上の困難さを理解しながら若い先生のを少しでも引き出すように心がけることで、ストレスが軽減されることがあります。ストレスに対処しにくいときは、総合教育センター教育相談部(申込先: mental@kyoto-be.ne.jp) や「教職員健康相談24」でも相談できます。

